

技術とサステナビリティの 専門家として将来の業績に対し 責任ある経営への監督を 果たします

社外取締役
小宮山 宏



長期目線で当社を理解し、 緊張感を持って監督責任を果たす

私は研究者として、塩ビモノマーの製造プロセスや半導体製造に欠かせない薄膜を作る技術の研究をしていたので、当社のことはよく知っていました。地球環境問題に懐疑的であった時代から警鐘を鳴らしていた科学者の一人でもあり、東京大学に地球環境工学研究共同体を作り、また、サステナビリティ課題を研究する世界初の大学連携 (AGS) を立ち上げ、その運営も主導しています。また、科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム (STSフォーラム) の理事長も務め、科学技術に関する最先端の情報にも触れています。ですから、当社の経営の監督役として人後に落ちないと自負し、2010年から社外取締役をお引き受けしています。

社外取締役の任期が長期におよぶと、独立性を懸念する声があることは承知していますので、常に緊張感を持って経営の監督責任を果たすことを信条とし取り組んでいます。当社は、地道な技術の積み上げによって競争力を築いています。また、塩ビだけでなく、半導体・電子材料から機能材料まで数多くの素材を提供していますが、それらは、さまざまな技術を融合させることで生み出しています。当社の技術優位性を長期目線で理解することが必要です。短期的な目線で部分だけを見て事業を入れ替えるような経営をしていたら、今日の当社はありません。

現場や技術を理解したガバナンス

当社では、取締役会と詳細な討議を行う常務委員会が設けられています。それらの場で私は積極的に議論に加わっておりますが、秋谷副会長と斉藤社長が私の質問に直接回答したり、事業責任者の説明の後に補足説明をする機会が多いことが印象的です。これは、トップが現場や技術のことを正確に理

解し、意思決定がなされている証左で、まさに当社のガバナンスが機能している好例です。

当社では高度な技術が部門横断的に展開されており、これはガバナンスが機能していないと成し得ません。

私は、当社の製品や技術が地球環境の負荷低減に貢献していることをもっとアピールすべきと提案しています。例えば、シリコーンゴムの純度を高める技術は、当社の収益性を向上させるだけでなく、それを加工するお客さまの工程を減らし、社会の脱炭素にもつながります。

「カーボンニュートラル宣言」を評価

当社は「2050年カーボンニュートラル」を宣言しました。より少ないエネルギーで製品を作ることを追求し、1990年比でエネルギー効率を約2倍に高めました。化学メーカーにとりカーボンニュートラルは難しい挑戦ですが、だからこそ技術と実績がある当社は先陣を切るべきであり、今回、勇気をもって踏み出したことはすばらしい決断であると評価しています。

真のサステナビリティを問うていく

金川会長が逝去されましたが金川イズムは現経営陣にしっかり受け継がれています。生成AIが急速に進化し、人間の働き方を大きく変えることが想定されますが、こうした世の中の変化を的確に次の成長に結び付けていくことが真の意味での企業のサステナビリティです。デジタルの技術は、物づくりとは次元の異なる速さで進化しており、それらを巧みに使いこなせる人材の確保や育成は急務です。10年先を見据えて人を養成し、将来の業績に対し、経営がどのように責任ある行動をすべきかを問うていくことも私の重要な使命であると考えています。